

『冬物語』における王権とヒューマニズム
—新たな時代の幕開けを前にして—
Kingship and Humanism in *The Winter's Tale*
— Before the Dawn of a New Era —

石橋敬太郎*
Keitaro ISHIBASHI

James I, the King of England, controlled the state and the people as an agent of God. It has been pointed out that Shakespeare's *The Winter's Tale* represents the idea of autonomy by using language to represent power in a way that conforms to the Stuart claims to absolute authority. During the time the play was being presented, however, intellectuals had been trying to be released from the subservient view of human beings represented in the Stoic view of nature. This led them to doubt the sacred power of the King. In the play, in confrontations with Leontes and Polixenes, Paulina, Perdita and Florizel reject the Stuart ideology by using humanistic language. This paper will use the language of characters in the play to illuminate the ideas of intellectuals in the early 1600's that sought a release from the humanism which stemmed from the Stoic view of nature, and rejected the Stuart King's absolute control as an agent of God and the father of the people.

Keywords: *Humanism, Stuart ideology, Stoic view of nature*
ヒューマニズム, ステュアート朝のイデオロギー, ストア派の自然観

序

弱体な政権基盤を強化しようと、有力貴族に惜しみなく恩賜を授け、多額の費用を支出していたほか、王妃アンの浪費もあって、イングランド国王ジェームズ一世の王室費はいつも枯渇していた。事態を解決するために、1610年2月、ソールズベリー伯ロバート・セシルは、ジェームズ一世に年間20万ポンドの収入を確保する権利を与える代わりに、後見権や徴発権など封建制度由来の財政的権利を放棄することを議会に提案した(Davies 14)。大契約(グレート・コントラクト)と呼ばれるソールズベリー伯の提案は、地租などから確実な収入を国王に確保することと引き換えに、議会が国王の財政収入を監督し、封建領主を財政負担から解放する先駆的なものであった。この政策を推進するために、同年3月の議会においてジェームズは次のような演説をした。

君主制度の国家は、この世で最も崇高である。というのは、国王は、この世の神の代理人として神の王座を占めるのみならず、神によって神と呼ばれているからである。聖書のなかでは、国王は神と呼ばれている。したがって、国王の権力は、神の力にたとえられる関係にある。国王はまた家族の父にたとえられる。というのは、国王はまさに臣下の父だからである(Tennenhouse 150)。

ジェームズの演説では、世俗の権力はアレゴリカルに神のそれと結びつけられているが、最終的に「神」「国王」「父」が相互

に交換可能な概念として表されている。この演説によって、議会は、財政的に安定した国王による絶対王政化と貿易商人などに対する新たな課税を危惧し、議論を続けた(Davies 14)。ジェームズは、5月の議会において彼らの怠慢と遅延を非難したほか、国王大権について論じることを禁じた。同年11月、議会はソールズベリー伯の提案の審議を拒否する(Davies 14)。この国王と議会との緊迫した状況のもとでシェイクスピアの『冬物語』(*The Winter's Tale*)は執筆され、1611年5月に国王一座によってグループ座で初演されたわけである。本劇に関する先行研究では、こうした当時の政治的な文脈から、劇中の神々をジェームズに重ね合わせることで、作品解釈の重要な鍵であると考えられてきた。

その詳細は次の通りで、劇中におけるアポロの神託——王位継承者の発見による王国の再生——の実現は、神の代理人を自認し、家族と国家の類似性を利用して、臣下の父として絶対的な支配権を行使するジェームズ一世の支配原理を基盤で支えていると考えられてきた(Williamson 112)。また、終幕でのシチリア国王レオンティーズと彼の王妃ハーマイオニ、そしてボヘミア国王ポリクシニーズとの和解は、ジェームズが国内外の平和と繁栄に向けて、政治的な悲劇を悲喜劇に転じようとする政策を映し出していると解釈されている(Wickham 33-48)。さらに、パーディタとフロリゼル王子との結婚をジェームズの娘エリザベス王女とプファルツ選帝侯フレデリック五世とのそれに重ね合わせる見解も生み出してきた(Yates 32)。しかも、本劇は、シェイクスピアと同時代の劇作家ロバート・グリーン(1588)の散文ロマンス『パンドスト』(*Pandosto*) (1588)のほか、王権の家父長的

* 国際文化学科

な権威を主張するジェームズの『自由な君主制度の真の法』(*The Trew Law Of Free Monarchies*) (1598)、息子ヘンリー王子のために執筆された『バシリコン・ドロン』(*Basilikon Doron*) (1599)や祝祭をカトリック主義と論じる彼の見解などに基づいて作劇されている。こうしてみると、神々の導きのもと、人間の忍耐と改悛によって幸福な世界を回復するという本劇の筋立ては、いかにジェームズの王権を支えているかがわかるであろう。

それにしても、根拠のない嫉妬に苦言を述べられて、ポーライナを魔女と呼んだレオンティーズが、終幕でハーマイオニの彫像に生命を吹き込む彼女の術を正当な行為と認めたことについて、どのように考えたらよいのであろうか。ジェームズ一世が偶像崇拜を教皇主義として徹底的に批判していたことを文脈とするとき(James 303)、レオンティーズの見解は謎に包まれてしまう。フィーベ・ジェンセン(Phebe Jensen)やウォルター・S・H・リム(Walter S. H. Lim)によると、ハーマイオニの生命の復活の場面は、カトリック主義擁護に向かう初期近代イングランドの実際を示しているという(Jensen 279-306; Lim 317-34)。確かに、劇中においてポーライナが彫像に生命を吹き込んだ後で、レオンティーズたちが彼女の教会堂に行き、「そこで、食事をするつもりだ」(“there/they intend to sup”)(V.ii. 102-3行)¹と仲間に語る紳士の言葉は、パンとワインがイエスの肉と血となるカトリックの聖餐式を思い出させる。当時の祝祭に対する宗教改革者たちの見解を駆使したジェンセンたちの論考は説得力があるのだが、自制心を失いながらも、レオンティーズの威嚇にひるむことなく、勇敢に国王に正当な意見を述べるポーライナについては詳しく触れていない。

おしゃべりで口やかましく、医者および助言者として、レオンティーズに改心を迫り、アポロの神託を信じて、ハーマイオニとの和解を可能にするポーライナに着目するとき、彼女の言動には、保守的な神中心の世界観に対して人間そのものの価値を見出そうとするヒューマンイズムが垣間見えるのである。すなわち、当時のストア派の伝統では、神の創造物である自然は、自然法によって支配され、秩序、価値や目的を有しており、人間はその目的論的な意匠から免れなかった。そして、ストア派の流れをくむエリザベス朝の国教会の神学者リチャード・フッカーは、人間の本性が自然の創造主たる神に内在すると主張していた(1:209)。他方、1580年代には為政者に何をすべきかを教えることを目的として、神ではなく、人間の動機や行動をもとに過去を再現するローマの歴史家コーネリウス・タキトゥスの歴史観がヘンリー・カフ、トマス・サヴィルやウィリアム・カムデンたち知識人に歓迎されていた(Levy 250)。タキトゥスの歴史観が広がりつつあった背景には、1588年以降も続くスペイン

との戦いによるイングランドの財政基盤の悪化など、エリザベス女王を神の代理人とする体制側の君主像では説明しきれない政治的状况に直面していたことがある(Benjamin 275-76)。

さらに17世紀になると、ストア派の伝統的な自然観に導かれる人間観から解放されようとする思潮が現れてくる。たとえば、フランシス・ベーコンは、経験主義的な手法によって自然界の出来事を解明しようとする。後に、トマス・ホブズは、人間を自然から免れ、それにまさる存在と考える。舞台上目を向けてみると、パーディタは、人工も自然の一部とするポリクシニーズの自然観に異議を唱える。フロリゼルも、父王の存在を軽視してパーディタとの結婚を望むことによって、家父長制度の根幹を動揺させる。ほんの一瞬の出来事ではあるものの、若い二人の言動には、人間の自覚を促すヒューマンイズムが描出されている。最終的に魔術が人間の術と認識され、シチリアとボヘミアの結合までもが実現する。こうした驚嘆すべきことが実現するには、ポーライナによると、「信仰」が必要とされる。彼女のいう「信仰」とは、神々の支配する世界においてすら、人間が人間を信じる力を我々に問い直させることではなかったか。シェイクスピアは、『自由な君主制度の真の法』や『バシリコン・ドロン』などに見られるジェームズ一世の政治的、宗教的な言説を巧妙に劇中に取り込みながら、ストア派の伝統的な権威から解放されようとするヒューマンイズムを描出する。以下においては、ポーライナ、パーディタやフロリゼルのヒューマンイックな言動に着目して、この時代の人々の精神史の一端を描出しようとする劇作家の試みを明らかにしてみたい。

I

シェイクスピアの『冬物語』の基調をなすのは、イングランド国王ジェームズ一世の支配原理である。その支配原理は、レオンティーズが突如として王妃ハーマイオニに嫉妬し、国王の言葉が法律であるとして、カミロやアンティゴナスなど廷臣たちの助言を拒み続ける冒頭の場面から見られる。この場面は、嫉妬から王妃ベラリアと彼女の子もフォーニアを死に処するよう命じるパンドストに対して、宮廷の酌人であるフラニオンと宮廷人たちがその命令の撤回を求めた本劇の材源『パンドスト』にならったものである(Bullough 8: 168)²。このような場面が描出されたことについて、ステュアート・M・カーランド(Stuart M. Kurland)は、当時のイングランドにおいて国王が廷臣の適切な助言に耳を傾けることが重要な政治的課題であり、本劇はそれを取り扱っていると指摘する(365-86)。廷臣の選択の重要性は、

¹ 以下、シェイクスピア作品からの引用の幕、場および行数はすべて William Shakespeare, *The Winter's Tale*, ed., J. H. P. Pafford, The Arden Shakespeare Edition (Methuen, 1963) に拠る。

² 以下、グリーンズの『パンドスト』からの要約は本書に拠る。なお、材源では、ハーマイオニに相当するベラリア王妃が、潔白とはいうものの、夫パンドストの機嫌を損なうことがないよう

彼の友人エジストゥス国王の寝室に赴くこともたびたびあり、夫から疑われてもやむを得ない振る舞いが見られた。パンドストの嫉妬が妻と彼の親友との罪のない親しさを目撃するうちに徐々に醸成されていく点において(158頁)、シェイクスピアのレオンティーズのそれとは異なる。

息子ヘンリー王子のために執筆したジェイムズの『パシリコン・ドロン』においても言及されている。

国王とその身分の職務を優先できるように、廷臣を選ぶときには注意を払いなさい。ほかの職務においては、あなた自身の至福に注意を払わなければならないが、同様にあなたの臣下の至福のためにこれらの関心を払いなさい。そのことに対して、あなたは神に責任を負わなければならない。これらの職務のために、思慮があり、誠実で優れた良心をもっており、仕事にたけていると知られている人たちを選びなさい。また、党派心や偏愛がなく、とりわけ、すべて君主の疫病であり、国家の破滅を招く、あの汚らわしい追従という悪のない人たちを選びなさい(James 169)。

劇中のカミロやアンティゴナスは、まさにジェイムズが望む理想の廷臣であったであろう。ジェイムズの助言がきわめてヒューマニスティックであることも注目に値する。このヒューマニスティックな姿勢は、ポーライナに受け継がれる。彼女は、『パンドスト』には登場せず、シェイクスピアの創造である。そのポーライナは、自らの嫉妬と絶対的な王権を確信して、罪なきハーマイオニの言葉や廷臣たちの助言を次々と拒否し、破壊していくレオンティーズに歯止めをかけようとする。

それではなぜ、劇作家は、男性の廷臣ではなく、国王に助言をするのにふさわしい地位を与えられていないポーライナにこの役割を与えたのであろうか。しかも、エリザベス朝とステュアート朝のコンダクトブックや説教などにおいて、ロやかましい女性は批判の対象であった(Matz 85-92)³。事実、レオンティーズの暴挙と威嚇に屈することなく堂々と苦言を呈したポーライナは、彼から「人間の姿を借りた魔女」(“A mankind witch”)(II. iii 67)と呼ばれる。このような女性は、男性を脅かす「他者」として家父長制度において欠点とみなされており、それこそ魔女として烙印を押されたかもしれない。ここで着目したいのは、ポーライナがレオンティーズを批判する「役目は女性ももっともふさわしい」(“the office/ Becomes a woman best”)(II. ii. 31-32)とハーマイオニの侍女エミリアに述べたことである。ポーライナによると、女性には「ウィット」(知識や教養)がなく、伝統的に「ロやかましく、おしゃべり」で「無分別」な存在である。言い換えるなら、劇作家は、女性に特有の属性を逆手にとって、ポーライナにレオンティーズを批判させる。

どうかよくお聞きくださいまし。

私は陛下の忠実な臣下として、医者として、

もっとも従順な助言者として申し上げます。とは申しませんが、私はそのように見せかけるご家来とは異なり、陛下の不正に甘い顔を見せたりいたしません。

And, I beseech you hear me, who professes
Myself your loyal servant, your physician,
Your most obedient counsellor, yet that dares
Less appear so, in comforting your evils,
Than such as most seem yours;

(II. iii. 53-57)

ポーライナは、「医者」また「従順な助言者」として舞台上に登場しているものであり、決してレオンティーズのいう魔女ではない。むしろ、彼女の言動には、ヘンリー王子に宛てたジェイムズ一世の廷臣の選択に関する教訓が見出せる。それが明確に示されるのは、ハーマイオニの裁判の後の場面である。この裁判では、アポロの神託によってハーマイオニの無実が宣言される。だが、グリーンのパンドストとは異なり、レオンティーズはアポロの神託まで拒否する。そのさいに、アポロの審判を拒否した罰としての王子マミアスの死は、神の代理人であるジェイムズの支配原理を強く観客に印象づけたかもしれない。

ちょうどそのとき、ポーライナからハーマイオニの死を告げられて、正気を取り戻したレオンティーズは、「いままでのように、真実をはっきりと伝えてくれ、そのほうが同情されるよりはるかにありがたい」(“Thou didst speak but well / When most the truth: which I receive much better / Than to be pitied of thee”)(III. ii. 232-34)と述べて、彼女を受け入れる。そのことは、ポーライナの「ロやかましく、おしゃべり」で「無分別」な女性の言動が貴重な教訓に変換されたことを意味するであろう。彼女の教訓は、レオンティーズが自らの非を認め、「日に一度、二人の眠る教会堂を訪れ、そこで涙を流すのを唯一の慰めとしよう」(“Once a day I'll visit / The chapel where they lie, and tears shed there / Shall be my recreation”)(同 238-40)と語ることで高められる。彼が改心してカミロを忠実な人間と再認識したことも、人間そのものの価値を評価する当時のヒューマニズムを思い出させてくれる。ポーライナの女性としての言動がレオンティーズの専制的な暴力に対抗できる唯一の手段として高められた理由として、アン王妃を取り巻く宮廷女性たちのなかで最も重要な女性であり、文学者たちのパトロンでもあったベッドフォード伯爵夫人の存在が考えられているが、はっきりとしたことはわからない(中村 105-33)。少なくとも、劇中においてポーライナの「ロやかましく、おしゃべり」で「無分別」な女性の言動がヒューマニスティックな教訓として変換されていることだけは確認しておきたい。

³ 1591年の説教において、説教師ヘンリー・スミス(Henry Smith)は、女性には知恵も信仰心も忍耐も期待できず、ロやかましく、言葉を控えるべきと述べている。

II

神の代理人としてのジェームズ一世の支配原理を背景として、本劇が執筆・上演された時期に現出しつつあったヒューマニズムを描く劇作家の試みは、ボヘミアの場面にも見られる。すなわち、グリーンズの『バンドスト』では、パーディタに相当する生まれたばかりの赤児フォーニアは、船に乗せられ、運命にゆだねられて、シチリアの海岸に漂流する(Bullough 8: 173)。他方、シェイクスピアの『冬物語』では、シチリアの海岸がボヘミアの海岸に置き換えられるほか、レオンティーズの命令に従ったアンティゴナスがパーディタを捨てる場面が用意される。シチリアとボヘミアが置き換えられたことに関しては、はっきりとした理由はわからない。前に触れたように、ジェームズの娘エリザベス王女と、大陸のプロテスタント主義の指導者として期待されたプファルツ選帝侯フレデリック五世との結婚のうわさが劇作家にボヘミアをクローズアップさせたのかもしれない。むしろ、この場面で着目したいのは、アンティゴナスが夢のなかに現れたハーマイオニの言葉を信じて、パーディタをボヘミアの海岸に捨てたことである。夢を信じた彼の行動にはローマ・カトリック教会の伝統が見られると、リムはいう(Lim 322-23)。なるほどそうかもしれないが、夢を信じて行動するアンティゴナスのなかに、出来事を動かす人間の動機が見出せないだろうか。すなわち、彼の行動には、この世の出来事を超自然的なものではなく、人間の動機や行動から解釈しようとするヒューマニスティックな時代思潮も垣間見えるのである。

もちろん、アポロなど神々をジェームズ一世にたとえる文脈からすれば、邪悪なレオンティーズの命令に従ったアンティゴナスは熊に食い殺され、パーディタを運んだ船と乗組員は嵐の海の犠牲にならなければならない。こうした体制側の支配原理は、グリーンズのフォーニアが羊飼いボラスと彼の妻モプサによって養育されていることとは異なり(Bullough 8: 174-76)、シェイクスピアのパーディタが羊飼いと彼の息子に育てられていることからわかる。劇作家が母ないし妻を劇中から排した理由について、マリリン・L・ウィリアムソン(Marilyn L. Williamson)は、女性の生殖性を吸収するジェームズの家父長制度を表しているという(146-48)。そのようなジェームズの支配原理を基盤で支える演劇構造は、家父長制度のみならず、彼の宗教政策をも映し出す。すなわち、パーディタは、羊の毛刈祭りにおいて祝祭の女王に扮することから距離をおき、ジェームズの反カトリック主義的な宗教政策を喚起する。

もしこれが、

お祭りにつきものの
冗談で、愚かな習慣であると
みんなが考えてくれなければ、私はきっと
その衣装を見て顔を赤らめるでしょう。

... but that our feasts

In every mess have folly, and the feeders
Digest it with a custom, I should blush
To see you so attir'd; swoon, I think,
To show myself a glass.

(IV. iv. 10-14)

パーディタが祝祭に距離をおく姿勢は、宗教改革以前に行われていたイースターやメイゲームなどの祝祭をノスタルジックに描くジョン・ストウ(John Stow)の説明とは対照的である(1: 91-99)。ストウが思い描く祝祭は、ジェームズの時代も連綿と続いてきたであろう。本劇が執筆された時期になると、宗教改革者たちは、祝祭が宗教的に保守的な政策を促進するほか、聖霊降臨節の祭典、メイゲーム、熊いじめやモリスダンスですらカトリック主義の偶像崇拜あるいは迷信の痕跡であると論じていた(Hutton 153-99)。宗教改革者たちの祝祭に対する批判は、後にジェームズ一世の『合法的なスポーツに関する宣言』(Declaration concerning lawfull sports)(1617)の主題を構成するに至る(Hutton 196-205)。劇中のパーディタが「聖霊降臨節」の芝居に言及して、「この衣装がいつもの私の気持ちを変える」(“this robe of mine / Does change my disposition”)(IV. iv. 134-35)と語るのも、ジェームズの反カトリック主義的な宗教政策を映し出していたと考えられよう。さらに、オートリカスが「まるで自分の安ピカものが神聖なものとされ、買い手に祝福をもたらす」(“as if my trinkets had been / hallowed and brought a benediction to the buyer”)(同 602-3)というとき、彼の安ピカものは、ジェームズが『すべてのキリスト教徒の君主に向けて』(To All Christian Monarches)(1609)において偶像崇拜とみなしていた聖遺物に変換される(303)。

III

ジェームズ一世の支配原理を背景としてアクションを展開するなかで、シェイクスピアの視線は、再び現出しつつあったヒューマニズムに向けられる。それは、王子フロリゼルが羊飼娘に恋をしているとのうわさを聞いたポリクシニーズとカミロが、息子の行状を探るために変装して羊の毛刈祭りに現れる場面に見られる。この場面では、カーネーションと斑のナデシコをめぐる「自然と人工」の議論がパーディタとポリクシニーズの間で行われる。パーディタによると、それらの花の赤と白の斑模様は、偉大な造化の自然に人工の手が加わってできた自然の私生児であるという。ポリクシニーズは、その人工の手を生み出すのも自然であるとして、彼女の自然観をはねつける。この議論において重要なのは、ポリクシニーズが人間の作り出したものも神の創造である自然の一部として彼女に印象づけていることである。本劇が執筆された時期、フランシス・ベーコンが観察と実験によって自然界の出来事を解明しようとしていたことを背景とするとき、ポリクシニーズの自然観は、現出しつつある新しい自然観を否定するものであった。そのことはまさに、

ジェイムズのストア派の自然観に基づく支配原理を支えるものであったであろう。

しかし、パーディタは、「一茎でもあの花を植えるのに土を掘る気はありません」(“I’ll not put / The dibble in earth to set one slip of them”) (IV. iv. 99-100)と述べて、ポリクシニーズの自然観に反論する。ほんの一瞬ではあるが、パーディタがジェイムズ一世の自然観を否定していることも見逃せない。その結果、グリーンが『パンドスト』の副題である「時の勝利」は、時の経過のなかで真実が現れ出るという意味をもっていたのだが(Bullough 8: 156)、シェイクスピアの舞台では新しい時代思潮を前にした「羊飼いの娘とそれにまつわること」 (“A shepherd’s daughter, / And what to her adheres”) (IV. i. 27-28)が「時」の主題となる。フロリゼルも、身分の相違や父の存在を軽視した結婚観を展開して、ポリクシニーズの怒りを買う。すなわち、変装を脱ぎ捨てたボヘミア国王は、息子の相続権を奪うのみならず、人類の祖デュエカリオンよりさらに昔にさかのぼって縁を切るという。

ポリクシニーズの言葉は、『バシリコン・ドロン』のなかでヘンリー王子と同じ地位と宗教をもつ女性との結婚を求め、「最初に自らの地位より卑しい人と結婚すれば、その後評価されないであろう」と助言したジェイムズ一世のそれを代弁している(172)。息子の結婚に対する彼の強い関心の背景には、家父長制度の強化による王国の安定があった。もちろん、ポリクシニーズがフロリゼルを廃嫡すれば、シチリアと同じように、ボヘミアでも王位継承者は途絶えてしまう。シェイクスピアが身分差によってもたらされるグリーンとのドラスツスの結婚のためらいをフロリゼルから切り捨て(Bullough 8: 179)⁴、最初から彼をパーディタの誠実な恋人として描いていることも忘れてはならない。本劇の見どころは、いかにもパーディタがシチリアの王女であることが発見され、王国を再生するかにある。これを助けるのがカミロである。劇の前半において、カミロは、ポリクシニーズの逃亡を助け、今度は王子と王女をシチリアへと逃亡させて、二人の結婚による王国の再生の担い手となる。

IV

シチリアの宮廷では、レオンティーズが悔恨と祈りの日々を送り続けている。廷臣たちは、王国の継承と安定のため彼に結婚するよう駆り立てる。もちろん、神託とポーライナとの約束を守ることを誓ったレオンティーズは、彼らの言葉に耳を傾けない。ここでは、国王を神ではなく、人間として考えた古い演劇上の伝統が喚起されている。フロリゼルとパーディタが登場すると、レオンティーズは、彼らを「大地が春を迎えたようだ」 (“As is the spring to th’earth”) (V. i. 151)と喜び、迎え入れる。そして、彼は「私が今、お二人のように立派に成長した息子と娘を

見ることができたなら」 (“Might I a son and daughter now have look’d on, / Such goodly things as you”) (同 176-77)と王位継承者の不在を深く嘆いた後で、結婚を許されない二人の擁護者としてポリクシニーズと会う約束をする。レオンティーズがこの難題をどのように解決するのかも、本劇の見どころであったであろう。だがこの後に、羊飼いの老人がもっていた包みと当時のいきさつの報告によってパーディタの身分が判明し、父と娘が対面したことが紳士たちによって語られる。アポロの神託どおり、王位継承者の発見によってシチリアとボヘミアの両王国は再生される。アポロの神託の実現が神の代理人であるジェイムズ一世の支配原理を基盤で支えていることは繰り返すまでもない。

パーディタとの再会の後、レオンティーズたちは、ポーライナの招きによって、不世出のイタリアの巨匠ジューリオ・ローマーノの手になるハーマイオニ像を見に出かける。当時のイングランドでは、実物そっくりに彩色を施して、自動で動く彫像を作り出す技術が進んでいた。たとえば、水力などで動く彫像は、アン王妃のサマーセット・ハウスで見られた(Tigner 128)。ほぼときを同じくして、イニゴ・ジョーンズは、機械仕掛けの舞台装置を宮廷仮面劇に取り入れた。劇作家は、そのような美術の流行を取り入れ、材源にはないハーマイオニ像を創造したと考えられる。そして、「本当にあの像を動かし、台から降ろし、お手を取らせてご覧に入れる」 (“I’ll make the statue move indeed; descend, / And take you by the hand”) (V. iii. 88-89) ために、ポーライナは、次のような条件を居合わせたレオンティーズたちに要求する。

それにはまず、信仰を目覚めさせていただきとう存じます。それでは、どなたさまもお動きなさいませぬように。その前に、これから私が行くことを不法な行いとお考えの方にはご退出をお願い申し上げます。

It is requir’d
You do awake your faith. Then all stand still:
Or—those that think it is unlawful business
I am about, let them depart.

(V. iii. 94-97)

ポーライナは、彫像に生命を吹き込む術を「不法な行い」とみなす人々に退出を求める。前に、レオンティーズは、彼女を魔女と呼び、彼女の言葉にまったく耳を傾けず、宮廷から追い払おうとした。だが今、レオンティーズは、ポーライナの術を「これが魔術なら、魔術を食事同様の正当な行為」 (“If this be magic, let it be an art / Lawful as eating”) (V. iii. 110-11) として認める。ジ

⁴ もちろん、羊の毛刈祭りという祝祭を利用して、合法的にパーディタと結婚するために、結婚の儀式を済ませようとするフロリゼルのよからぬ動機を指摘する批評家もいる。たとえば、

Jennifer Richards, ‘Social Decorum in *The Winter’s Tale*’, in Jennifer Richards and James Knowles eds., *Shakespeare’s Late Plays: New Readings* (Edinburgh University Press, 1999), p. 81 を参照されたい。

ジェームズ一世が偶像崇拜を教皇主義として徹底的に攻撃していたことはいうまでもない。しかし、その偶像崇拜的な雰囲気や強調しすぎるとき、ともすれば、その内奥の意味を見過ごしがちになる。そのことは、ポリクシニーズがポーライナに「彼女が今までどこで生きておられたのか、はっきりと話していただく」(“make it manifest where she has liv'd”) (同 114) と問うたことからわかる。すなわち、彼は、ハーマイオニがどこかで密かに生きていたことを即座に理解して、その苦勞に共感を示そうとし、偶像崇拜とは異なる次元で彼女に問いかけているからである。そして、ポーライナの魔術が人間の術と認識され、ハーマイオニの許しによるレオンティーズとの和解がなされることによって、本劇はクライマックスを迎える。さらには、シチリアとボヘミアの結合までもが実現する。

こうした驚嘆すべきことが実現するには、ポーライナによると、「信仰」が必要とされる。それでは、彼女のいう「信仰」とはいったい何を意味しているのであろうか。繰り返しになるが、レオンティーズの嫉妬と彼の常軌を逸した感情に直面したとき、彼女は、その感情を暴君と呼び、医者および助言者として、伝統的なヒューマンイズムの役割を果たしてきた。彫像の場面では、彼女の術は居合わせた人たちに人間的なものとして認められる。そのように考えるとき、彼女が求めた「信仰」とは、まさに人間が人間のもつ力を信じ抜くことによって、過去の罪悪や苦難が償われるとともに、死んだと思われたハーマイオニの復活と幸せな家族の再生を生み出す力ではなかったのか。言い換えるのなら、ジェームズ一世が劇中の神々に重ね合わせられているとはいうものの、彼女の言葉には、そうした伝統的な権威から解放されようとする時代思潮が示されている。

材源となったグリーン物語の最後では、ボヘミア国王パンドストがフォーニアの美しさに魅せられて、執拗に彼女を愛妾にしようとする。後になって、フォーニアが自分の娘であることを知り、彼女をドラスツスと結婚させた後に、彼は自身の行為を恥じて自害する(Bullough 8: 199)。シェイクスピアの劇では、レオンティーズは、ハーマイオニに許されて、新たに夫婦関係を構築することがほめかされている。興味深いのは、この和解によってレオンティーズの国王としての家父長的な権威が回復することである。すなわち、彼はポーライナにカミロを夫とするように命じる。過去の罪を後悔し許されても、レオンティーズの絶対的な王権は変わらない。レオンティーズがカミロを重要な廷臣としてみなしていることにも注目するとき、彼の家父長的な権威の回復には、女性を男性優位の伝統的な夫婦関係のなかに取り込み、ジェームズ一世の家父長制度を強固に築き上げようとする劇作家の周到な戦略が見て取れる。だが、彼の『バシリコン・ドロン』などに見られる政治的、宗教的な言説を劇中に映し出しながら、神の代理人を自認した彼の支配原理を支える演劇構造であっても、ポーライナ、パーディタやフロリゼルに見られた伝統的なストア派の権威から解放されようとしたヒューマンズティックな言動は決して色あせることはないと考えられるのである。

Works Cited

- Benjamin, Edward B. ‘Sir John Hayward and Tacitus.’ *The Review of English Studies* 8, 275-76, 1957.
- Bullough, Geoffrey. *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*. Vol. 8. Routledge and Kegan Paul, 1973.
- Davies, Godfrey. *The Early Stuarts 1603-1660*. Clarendon Press, 1987.
- Hooker, Richard. *The Works of That Learned and Judicious Divine Mr. Richard Hooker*, ed., John Keble. Vol. 1. Regent College Publishing, 2009.
- Hutton, Ronald. *The Rise and Fall of Merry England: The Ritual Year 1400-1700*. Oxford University Press, 1994.
- James I. *The Workes*. Georg Olms, 1971.
- Jensen, Phebe. ‘Singing Psalms to Horn-pipes: Festivity, Iconoclasm, and Catholicism in *The Winter’s Tale*.’ *Shakespeare Quarterly* 55, 279-306, 2004.
- Kurland, Stuart M., ‘“We need no more of your advice”: Political Realism in *The Winter’s Tale*.’ *Studies in English Literature 1500-1900* 31, 365-86, 1991.
- Levy, F. J. *Tudor Historical Thought*. Huntington Library, 1967.
- Lim, Walter S. H. ‘Knowledge and Belief in *The Winter’s Tale*.’ *Studies in English Literature 1500-1900* 41, 317-34, 2001.
- Matz, Robert, ed. *Two Early Modern Marriage Sermons*. Routledge, 2016.
- Richards, Jennifer. ‘Social Decorum in *The Winter’s Tale*’ in Jennifer Richards and James Knowles eds., *Shakespeare’s Late Plays: New Reading*. Edinburgh University Press, 1999.
- Stow, John. *A Survey of London*, ed., C. L. Kingsford, Vol. 1. Cambridge University Press, 2015.
- Tennehuose, Leonard. *Power of Display: The Politics on Shakespeare’s Genres*. Routledge, 1986, rpt. 2005.
- Tigner, Amy L. ‘*The Winter’s Tale*: Gardens and the Marvels of Transformation.’ *English Literary Renaissance* 36, 114-34, 2006.
- Wickham, Glynn. ‘From Tragedy to Tragicomedy: *King Lear* as Prologue.’ *Shakespeare Survey* 26, 33-48, 1973.
- Williamson, Marilyn L. *The Patriarchy of Shakespeare’s Comedies*. Wayne State University Press, 1986.
- Yates, Frances A. *Shakespeare’s Last Plays: A New Approach*. Routledge and Kegan Paul, 1975.
- 中村裕英。『冬物語』におけるポーライナの創造とベッドフォード伯爵夫人、『広島大学総合科学部紀要』8, 105-133, 1999。
- 掲載にあたり、貴重なコメントくださったお二人の査読者に心から感謝申し上げます。